

〔書評〕

安森敏隆著 『風呂で読む 短歌入門』

山 広 実 美

先ず一輪車に乗っている著者のイラストに惹かれた。スリリングで軽快、ユーモアがあり、意欲的で魅力満点のポーズ。好奇心を持つ事、試乗する事、習熟する事。ここに人生の楽しみがあり、生き甲斐がある。

誰にでも作れる短歌。「あなたも一緒に作りませんか。」とやさしく勧誘する所がよい。私はこの入門書を読み始めると、面白くて一気に読んだ。たちまち再読、三読、繰り返し繕っている。外出の時は、いつもカバンに入れて常住坐臥、暇さえあれば読んで飽きる事がない。

著者も「こんな楽しい本を書いたのは始めてである。」と言い、著者会心の、自信に満ちた入門書である。

「はしがき」にも「寝ていても、部屋にいても、歩いていても、自転車に乗っていても、電車の中でも、飛行機の中でも、いつでもどこでも短歌はできます。……作ろうと思っただけから、さあ、作りはじめてください。御案内します。無限の可能性にむかって。」

と力説している。

次に「宇宙短歌百人一首」の表紙画もすばらしい。これはヤマハミュージックメディア発行所の、宇宙飛行服を着た向井千秋さんが宇宙から呼びかけている画である。著者安森氏は着眼着想とにも新鮮で、未開の境にチャレンジする所がよい。

私は著者と一緒に風呂に入り、リラックスして短歌の話を聞いているようである。気楽な中にも時にピリツとした御高説を聞く事ができて近來稀に見る感激の書である。入門書ながら専門の歌論書にも劣らない。

1、宇宙からの発信

一九九八年一月五日、宇宙の向井千秋さんから地球への五七五の〈問い〉である。

宙がえり何度もできる無重力

の上句に対して実に一四万四七八一首の下句が寄せられたとは。

それも五歳から一〇一歳まで。

宙がえり何度もできる無重力 向井千秋

まかせてみたい動かぬ体 荒井正之

作者の荒井さんに無重力の可能性をあたえ、希望をあたえた向井さんの上旬は、二一世紀にむかって短歌の未来を拓いてくれていますと述べている。

2、九〇歳からの短歌入門

著者が指導していた水谷タネさんは、九二歳から短歌を作りはじめられ、歌集「白寿の春」(昭和60)には、水谷さん、満九二歳から九八歳までの歌、四二七首が載せられていると言う。

河沿の家並逆さに影映し空とぶ小鳥水底に見る 水谷タネ

自分の〈眼〉で見、自分の耳で聞き、自分の肌で感じたことを素材にした歌である。

パンジーの種を貰いて鉢に蒔く花咲く春に逢うやも知れぬ

水谷タネ

等の歌を紹介している。

3、一三〇〇年の、いま

なぜ、短歌は今日まで一三〇〇年もつづいてきたのでしょうか？と著者は問うている。

一つは、人間の中で変わらない〈愛〉とか、〈生〉とか、〈死〉

とかいう根源的で普遍的なものをつづけてきたこと、もう

一つは、その時代時代の先端部をつかまえ、うたってきたといっている。

ピアスして剪定をする青年の携帯電話が樹の上に鳴る

堀内孝子

いまの時代の一面を活写していると言う。

4、和歌から短歌へ

和歌は「やまとうた」と言い、小野小町がうたおうが、紀貫之がうたおうが、当時の時代の美意識に合わせるしかなかったのですと言う。近代になって、一番苦労したのは、この五七五七七の伝統を背負った形式に生ま身の〈私〉をもちこむ、ということだった。それをきまった歌詞ではなくて、日常の言葉でもちこむことだったと言う。

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだ

えの子

与謝野鉄幹

この歌には「子」の七回におよぶ反復がある。前の四つは明治という時代の〈公〉的発想に依る「子」で、後の三つは鉄幹の〈個〉的発想に依る「子」であると言っているのはよく分かる説明である。

かたちの子春の子血の子ほの子いまを自在の趨ながらず

や

与謝野晶子

これは晶子の「われ」を中心とした自我の歌で充たされていると言う。

5、見る、ということ

近代の歌は「自分の〈眼〉で見てうたう」というのが大切である。特にこの項は著者安森氏独特の良き持ち味が出ていて、他の追隨を許さぬ、名解説である。

出雲路をとほり来りて山青きふたつの墓に今そぬかづく

斎藤茂吉

「二つの墓のうち、憲吉でないもう一つの墓は誰ののだろうか」と、歌人の塚本邦雄から電話がかかってきたことがあります。かつて私は母校（三次高校）の先輩である中村憲吉の墓を見に行つたことがありますと著者は述べている。茂吉は昭和14年に憲吉の故郷の布野（広島）を尋ねている。その年の三月に亡くなった中村孝（憲吉長女の婿）の墓参の為であり、茂吉の手帳には、中村憲吉・中村孝・祖母の三つの墓に彫られた命日が記されている。ところが作歌の段階になって、この三つから祖母の墓をはずして「ふたつの墓」とした。これも「写生」だと言う。

安森氏著の「斎藤茂吉短歌研究」の一一六ページにも、

「作歌の段階になると『祖母の墓』のみをはずし『ふたつの墓』のみを見事に詩に昇華させたのである。それは茂吉の『写生』論にあわせていえば、何千何万とある『現実』のうちから、ほとんどのものを削ぎおとしポエティカル・マテリアルをすくいあげることであつた」とある。

「付記」著者の母校は広島県立三次高校でその前身たる旧制三次

中学には中村憲吉と倉田百三の両先輩あり、良き伝統ある環境であつた。中村憲吉の故郷（布野村）の隣に安森氏の故郷（三次市）があるのも御縁がある。

6、〈成る〉短歌と〈在る〉短歌

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

若山牧水

の有名な短歌も、もとは、

白鳥は哀しからずや海の青そらのあをにも染まずただよふであつたのを、リズムや意味を考えながら、ただ見たままでなく、自分の心も入れながら自分の三一音に成らせてゆくのですと言う。

「はくてう」の振り仮名を「しらとり」に変え、「海の青そらのあを」を「空の青海のあを」にひっくり返して作りなおしたのである。

7、詩のことば

東京

今夜北の風 晴のち曇

明日北のち南の風

曇時々 晴のち一時雨

福岡

今夜北東の風 曇一時晴

おそくなつてところにより にかか雨

明日北東一時南東の風 一時雨

ただの天気予報のようであるが、

「二人 寺山修司」

のように、署名と題名を記す事によって、無味乾燥な天気予報から、淡い恋唄へと変つてきたと言ふ。

「東京」と「福岡」が若い「男」と「女」になつて、すばらしい詩になつた。

「天気予報」は、前者の「言葉Ⅱ意味」を強調した日常言語で、「二人」は、後者の「言葉Ⅱイメージ」を強調した詩的言語であると、明解な説明には驚嘆する。

さらに言葉には、もう一つ（もの）の根源にまで遡る「言葉Ⅱもの自体」の言霊的言語があると説く。

さて、この本は「風呂で読む」ものであるが、あまり長く浸つていると、のぼせる恐れがある。そこで著者は、少しピリツとした一言を浴びせる。それが「言霊的言語」である。

龍門村佐々羅のなだりわざをぎのをみなほとの陰處や曼珠沙華燃ゆ

龍門村の、佐々羅のなだらかな所の、わざおぎの巫女みこが籠り住んでいるあたりに、曼珠沙華が燃え出ているよ」とでも訳しておけばよいでしょうと親切なアドバイスである。

言葉（龍門村・佐々羅のなだり・わざをぎのをみなほとの陰處）が日常性をこえてそのもの自体の言霊的言語（言葉Ⅱもの自体）を志向していると言ふが、これは高度の説であるから、もう少しやさしく話してほしかった。

8、おんな歌の、いま

平成9年、著者は末竹氏と共に編で「近代短歌と現代短歌」を出した。その中に「男歌と女歌の前線」の章を設けているのも参考になる。昭和29年、中城ふみ子の「乳房喪失」が「短歌研究」の第一回、五〇首詠（新人賞）の特選となり、女流歌人達が陸続と登場したと言ふ。「おんな歌」には〈やさしい母〉で〈やさしい妻〉、つまり良妻賢母型の与謝野晶子も居れば、〈弱い母〉〈弱い妻〉の中城ふみ子も居る。

産まざりし者に打たせてなるものか争う夫と子をまもりいる

青木昭子

これはまさに〈強い母〉〈強い妻〉。

君を打ち子を打ち灼けることき掌よざんざんばらんと髪とき

河野裕子

は〈こわい母〉〈こわい妻〉。

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言つてしまつていいの

俵 万智

〈クールな若者〉で女性歌も面白い。

9、詠嘆の声

短歌は「抒情詩の形式」であり「詠嘆の形式」であると斎藤茂吉は言っている。

夕雉子いきを短く啼くきけば母父思ほゆ腸を断つがに

山本 保

下句の「母父思ほゆ腸を断つがに」というフレーズの、意味をこえたりリズムのころよさが効果的で、詠嘆の声を伝えていると言

10、短歌がタンカになるとき

漢字の「短歌」が、かたかなの「タンカ」に変わり、幅広い、一〇〇万人の目に見えない友へ発信され始めたと言

上田三四二は「地上一寸」の歌がよいと言った。俵万智の短歌を一步としたら、浜田康敬が五歩、安永蒔子と安森氏は一〇歩、塚本邦雄は一〇〇歩かと言

うし、跳び方が少いからといって駄目なわけでもないと言

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピ

塚本邦雄

まさに一〇〇歩も跳んでいる。

きわめて楽しく、一気に感想を書かせてもらった。ところどころ五回に渡ってコラムがあり、よい刺激になり、よい清涼剤であった。身近にありながら忘れがちな「幻想」「感覚と感性」「主

観と客観」「五七調と七五調」の五項が勉強できた。学者の本は固苦しく、歌人の論は平板になり易いが、安森氏の文は冴えて興味津々、しかも入門書から短歌の奥伝を授けられた満足感を味わう事ができた。作歌欲が油然と湧いた事に感謝申し上げる。

(やまひろ・じつみ 広島県備北文芸の会顧問)